

声とテキスト論

研究代表者 高 木 裕

1. 分担者

佐藤 徹 朗
城戸 淳
先田 進
鈴木 孝庸
廣部 俊也
藤石 貴代
佐々木 充
金山 亮太
高橋 康浩
金子 一郎
木村 豊
村上 吉男
平野 幸彦
斎藤 陽一
桑原 聡
番場 俊
橋谷 英子
鈴木 正美

2. 2007年度の研究活動の概要

(1) 講演会

国際シンポジウム「声とテキストとまなごしの19世紀」(2007年11月)
19世紀研究所との共催

講 師：ボルドー第3大学のエリック・ブノワ教授

講演題目：「声の中の空虚 — ボードレール、ヴェルレーヌ、マラルメー」

(2) 研究会懇話会（2008年2月）

今年度は、国内の他大学の研究グループとの交流もおこなわれた。この2月に愛媛大学法文学部から牧秀明教授（ドイツ文学）をお招きし、同学部の「多文化社会研究会」の活動について報告をして頂いた。2000年に発足した、この研究会の目的は、「多文化社会の出現にともなう諸問題について総合的に研究を行い、その成果を大学での教育に生かすとともに、社会に還元すること」と規定され、実際にこれまでに6回の公開シンポジウムを開催し、中でも「四国遍路と世界の巡礼」は、地域と密着したテーマを世界に結びつけたもので、2004年10月には各国の研究者を招いて、国際シンポジウムを開いている。松山という土地柄、文化風土も関係しているが、地域社会と行き来しながら、研究成果を公開講座やシンポジウムという形で積極的に社会還元している点に、大いに見習うべき点があると思った。

3. 2007年度の研究成果の概要

(1) 研究成果の公開としての授業

「人文超越科目C テキスト論研究」として、講義（水曜日の3限）を開講した。「声とテキスト論」プロジェクト参加者から、高木、城戸、平野、鈴木（孝）、木村が参加し、研究分野代表の栗原先生にも加わって頂いた。テキストと〈声〉の関係を中心に、各教員それぞれの領域分野におけるこの問題の特徴をわかりやすく受講生に解説した。

(2) 単著及び紀要論文（次の項を参照）

4. 2007年度の研究成果の一覧

(1) 図書

高木 裕（他）、『これからの文学研究と思想の地平』、右文書院、2007年7月
鈴木 孝庸（他）編、『平家吟譜 — 宮文庫記念館蔵平家物語 —』、瑞木書房、

2007年

(2) 論文

- 佐々木 充, 『ハムレット』における想起の技法 —ロレンス・オリヴィエ監督・主演の映画『ハムレット』(1948) —, 「英文学会誌」(新潟大学英文学会), 30号, 2007年
- 番場 俊, スタヴローギンの告白? —『悪霊』論の手前で, ユリイカ, 39巻, 2007年
- 鈴木 孝庸, 腰越状作文まで, 『中世文学の回顧』(勉誠出版)小林保治監修, 2008年